

2018年3月2日(金)

OHKが取り組み続けている「手話が語る福祉」企画 収録の様子をご紹介します。

OHKでは20年以上にわたり、聴覚障害者にもニュースを届けたいと、夕方のニュース番組の中で「手話が語る福祉」というコーナーを企画し、手話通訳者と聴覚障害者の方たちで構成されている手話放送委員会のご協力をいただきながら、現在でも月に1回放送をしています。現在担当の中西悠理アナを含め歴代の女性キャスター10名が携わってきました。2004年には放送批評懇談会が優秀番組などを顕彰する「ギャラクシー賞」（報道活動部門）を受賞しています。

今回は、今月の企画「岡山県内初の介助犬導入から1年」の手話通訳部分について、どのような流れで制作されているかをご紹介します。

まず、手話放送委員会の皆さんに、編集済のVTRとニュース原稿を見てもらい、企画の趣旨や内容を把握して頂きます。聴覚障害者の方々は、手話通訳スタッフを通して音声の内容を理解します。原稿を直訳するのではなく、全体の意味を把握した上で伝えるべき内容に合わせた手話を使う必要があります。又、どの世代にもわかりやすい手話で表現することも求められるため、全員でどう表現するか検討します。

この日は「介助犬の導入」という言葉に対する手話表現について、中西アナにニュース原稿上での意味を確認しながら、どんな表現で伝えたら良いか、いくつかの手話表現を試していました。



放送する手話表現を決めた後、放送素材の音声を再生しながら、その手話表現が読みのスピードに合うかどうかをテストします。手話通訳は聴覚障害者の方が担当する為、ニュース原稿のどのあたりを読んでいるかを、健常者スタッフが手話通訳担当者にペンで示しながら練習を重ねます。



この日は、若い人に理解できても高齢の方にとってわかりにくいと感じた表現を、全員が納得するまで検討を重ね、使う手話を選択していました。

放送で使用する表現が決まったら、アナブースで収録をします。収録時にはカメラの真上に置かれた原稿を棒で示しながら、音声が進んでいる位置を進んでいるかを手話通訳担当者に知らせながら進めます。モニターで映像を確認し、手の動きだけでなく、視線がカメラを向いているかなど、細かい部分までチェックします。

手話通訳部分の収録が完成した後は、中西アナがスタジオで伝える今回のテーマの冒頭部分の手話について委員会メンバーからレクチャーを受け、表現できるようになったら終了です。これで放送の準備が完了です。



「手話が語る福祉」は現在、手話通訳を担当する聴覚障害者3人を含む15人前後のスタッフが企画の放送に携わっています。聴覚に障害のある人達自らが、手話という表現を使って情報提供をする企画「手話が語る福祉」。OHKでは今後も、聴覚障害者だけでなく弱い立場の人達に対して思いやりのある社会であることを願い、この活動を続けてまいります。